

IBA学生の倫理意識



経営戦略研究科教授(経営戦略専攻) 宮本 又郎

●企業倫理の授業

私が経営戦略専攻で担当している授業科目の一つに「企業倫理」がある。経営戦略専攻においては必修科目と位置づけられているが、ビジネススクールで学ぼうとする学生にとってはさほど履修意欲の強い科目ではないように思われる。企業不祥事の頻発、賑やかなCSR論議などによって、この問題に関する学生の関心は確かに増大しているが、それでも、自社の経営理念や倫理綱領を正確に覚えている学生、自社のCSRレポートなどを読んでいる学生は必ずしも多くないし、まして、企業倫理の勉強を主目的にビジネススクールに入学してくる学生はまずいない。

このような状況であることを考えて、授業にあたっては、学生諸君がビジネスパーソンの立場から自ら、企業倫理、経営理念、CSRなどについて考える機会をもち、その意義を理解するようになることを最も重視している。また、企業倫理の講じ方としては、受講者がすでに立派な社会人であることを考慮して「道德論」はぶたないし、一方、「テクニク論」(例えば、不祥事が起こったとき、企業はどのように謝罪すれば影響を最小限に抑えることができるか、という種類の議論)も大学の授業内容にはなじまないと思っている。私としては、「資本主義市場経済のなかで企業が存在していく上で、企業倫理はどのような意味をもっているか」といういわば「企業本質論」のコンテクストのなかで、企業倫理を講じ、また、受講生にも考えて貰うことを基本としている。

具体的には、私の講義のほか、関西学院宗教総主事の田淵結教授による関学の建学精神についての講話、企業のCSR担当者によるゲスト講義、「CSR報告書」「企業不祥事」「経営理念」「フィランソロピー」「コーポレート・ガバナンス」などをテーマとするグループワークなどを交えて授業を進めている。

●企業倫理に関する個人の意識調査

授業で行っているもう一つの試みとして、受講生を対象とした「企業倫理に関する個人の意識調査」がある。これは1998年に高巖教授(麗澤大学)らとともに関西経済連合会加盟企業の社員に対して行ったのとほぼ同じアンケート調査をIBAの企業倫理受講者に対して行っているものである。調査は大きく分けて2つあり、一つは「企業倫理の現状について、ビジネスパーソン個人としてどう思っているか」という調査、第二は「企業倫理が企業に浸透するためには、企業内でどのような取り組みが必要になると思うか」という調査であるが、ここでは前者について紹介しよう。これについては20の質問項目を設けているが、そのうち5つの項目についての回答結果を取り出してみたのが参考表である。その5つとは「1. 会社は

企業倫理を積極的に導入すべきである」(ここで「企業倫理の導入」とは人権や法令の観点から、企業人が守らなければならない倫理規程や行動憲章を企業内で策定し、その遵守を徹底させる行動を指すとしている)、「2. 企業倫理の実践は、会社の利益につながるべきである」「3. 企業倫理の実践は現実に会社の利益につながっている」「4. 大学新卒者は就職先の決定にあたり、企業側の倫理への取り組みをかなり重視している」「5. 会社のやり方や方針が自分の良心に反したとしても、最終的にそれを受けいなければならないことが多い」である。質問項目1～4についてはスコアが高いほど「倫理的」、否定的内容の質問の5については低い方が「倫理的」といえよう。

参考：企業倫理に関する個人の意識調査

スコア：+2.0～-2.0

	98年関経連調査	関学IBA調査							合計
		06年3Q	07年1Q	07年3Q	08年1Q	08年3Q	09年1Q	09年3Q	
サンプル数	797	33	40	40	41	37	43	42	276
1. 企業倫理導入必要	1.21	1.30	1.60	1.63	1.37	1.46	1.42	1.50	1.47
2. 倫理と利益：合致理想	0.68	0.85	1.08	1.25	1.02	1.08	1.09	1.12	1.08
3. 倫理と利益：合致現実	0.20	0.27	0.63	0.55	0.56	0.46	0.47	0.67	0.52
4. 新卒者の評価	▲0.15	▲0.45	▲0.35	▲0.18	▲0.32	▲0.22	▲0.33	▲0.17	▲0.28
5. 良心反	▲0.06	0.21	▲0.13	▲0.15	0.41	0.22	0.21	0.14	0.13

さて、質問1～3について関経連調査とIBA調査を比較すると、明らかにIBAの方の倫理度が高い。時代の変化を表しているといえるだろうが、ビジネススクール学生の属性も示唆しているのかもしれない。また、IBA学生間にも、07年度の倫理度が他より高いなど、変動がみられる。受講生に感想を求めたところ、好不況と関係？企業不祥事の頻発度と関係？などの意見のほか、「近年ではコンプライアンスや倫理論議に、うんざり感が出ているのでは？」というがった意見もあった。質問4については、関経連、IBAともに、否定的回答となっていることが注目される。関経連は別途98年に某国立大学経済学部学生に同じ調査を行っているが、▲0.41のスコアであった。現役大学生は就活にあたって、企業の倫理性をあまり考慮しないと、社会人も学生も考えているということだ。大学生の「企業観」を示しているのか、それとも就活では倫理など考えている余裕がないということか。質問5「良心反」については、IBAでは07年度を除き、プラスのスコアとなっている。仕事の現実の場では個人的良心を貫くのは難しいということだろう。

そのほか、関経連調査では男性の方が、高年齢層ほど、役員・管理職が一般社員よりも「倫理的」という結果となっているが、IBA調査では、年齢別以外は、有意な差は認められなかった。とくに女性について関経連とIBAの違いは興味深い。

06年第3Q以来7回にわたってIBAでこのアンケート調査を行ってきた。今回はその一部を紹介したにすぎないが、あと1、2回追加してサンプルを増やし、より詳しい分析を行いたいと思っている。